

秋の修善寺

岡本綺堂

青空文庫

九月の末におくれ馳せの暑中休暇を得て、伊豆の修善寺温泉に浴し、養気館の新井方にとどまる。所作しよざい為のないままに、毎日こんなことを書く。

二十六日。きのうは雨にふり暮らされて、宵から早く寢床に這入はいつたせい、今朝は五時というのにもう眼が醒めた。よんどころなく煙草たばこをくゆらしながら、襖ふすまにかいた墨絵の雁と相對すること約半時間。おちこちに鶏が勇ましく啼ないて、庭の流れに家鴨あひるも啼いていゝる。水の音はひびくが雨の音はきこえない。

六時、入浴。その途中に裏二階から見おろすと、台所口とも思われる流れの末に長さ一間ほどの蓮根を浸してあるのが眼についた。湯は菖蒲けんの湯で、伝説にいう源三位頼政げんざんみの室菖蒲しつの前は豆州ずしゅう長岡に生れたので、頼政滅亡の後、かれは故郷に帰つて河内村の禪長寺に身をよせていた。そのあいだに折々ここへ来て入浴したので、遂にその湯もあやめの名を呼ばれる事になつたのである。もし果してそうならば、猪早太いのはやたほどにもない雑ぞうひ兵よう葉武者はむしやのわれわれ風情が、遠慮なしに頭からぎぶぎぶ浴びるなどは、遠つ昔の上じようろ

臍^うの手前、いささか恐れ多き次第だとも思った。おいおいに朝湯の客が這入つて来て、

「好い天気になつて結構です」と口々にいう。なにさま外は晴れて水は澄んでいる。硝子^{ガラ}戸越^{スレ}しに水中の魚の遊ぶのが鮮かにみえた。

朝飯をすました後、例の範頼の墓に参詣^{さんけい}した。墓は宿から西北へ五、六町、小山というところにある。稲田や芋畑のあいだを縫いながら、雨後のぬかるみを右へ幾曲りして登つてゆくと、その間には紅^{あか}い彼岸花がおびただしく咲いていた。墓は思うにもまして哀れなものであつた。片手でも押し倒せそうな小さい仮家で、柊^{ひいらぎ}や柘植^{つげ}などの下枝に掩^{おほ}われながら、南向きに寂しく立っていた。秋の虫は墓にのぼつて頻^{しき}りに鳴いていた。

この時、この場合、何人も恍として鎌倉時代の人となるであろう。これを雨月物語式に綴れば、範頼の亡霊がここへ現れて、「汝、見よ。源氏の運も久しからじ」などと、恐ろしい呪いの声を放つところであろう。思いなしか、晴れた朝がまた陰^{くも}つて来た。

押し終つて墓畔の茶店に休むと、おかみさんは大いに修善寺の繁昌を説き誇つた。あなたがちに笑うべきでない。人情として土地自慢は無理もないことである。とかくするあいだに空は再び晴れた。きのうまではフランネルに袷^{あわせ}羽織^{せおり}を着るほどであつたが、晴れると俄^{にわか}にまた暑くなる。芭蕉翁は「木曾殿と背中あはせの寒さ哉」といったそうだが、わたし

は蒲殿^{かばどの}と背中あわせの暑さにおどろいて、羽織をぬぎに宿に帰ると、あたかも午前十時。午後東京へ送る書信二、三通を認^{したた}めて、また入浴。欄干^{よこ}に倚^よつて見あげると、東南に連なる塔の峰や観音山などが、きようは俄かに押し寄せたように近く迫つて、秋の青空が一層高く仰がれた。庭の柿の実はやや黄ばんで来た。真向うの下座敷では義太夫の三味線がきこえた。

宿の主人が来て語る。主人は頗^{すこぶ}る劇通であつた。午後三時、再び出て修禪寺に参詣した。名刺を通じて古宝物の一覧を請うと、宝物は火災をおそれて倉庫に秘めてあるから容易に取出すことは出来ない。しかも、ここ兩三日は法用で取込んでいるから、どうぞその後にお越し下されたいと慇懃^{いんぎん}に断られた。去つて日枝神社に詣でると、境内に老杉多く、あわれ幾百年を経たかと思えるのもあつた。石段の下に修善寺駐在所がある。範頼が火を放つて自害した真光院というのは、今の駐在所のあたりにあつたといひ伝えられている。して見ると、この老いたる杉のうちには、ほろびてゆく源氏の運命を眼のあたりに見たのもあろう。いわゆる故国は喬木^{きようぼく}あるの謂^いにあらずと、唐土の賢人はいったそうだが、やはり故国の喬木はなつかしい。

挽物^{ひきもの}細工の玩具などを買つて帰ろうとすると、町の中ほどで赤い旗をたてた楽隊に行

きあつた。活動写真の広告である。山のふところに抱かれた町は早く暮れかかつて、桂川の水のうえには薄い靄^{もや}が這っている。修善寺通いの乗合馬車は、いそがしそうに鈴を鳴らして川下の方から駈けて来た。

夜は机にむかつて原稿などをかく、今夜は大湯換えに付き入浴八時かぎりと触れ渡された。

二

二十七日。六時に起きて入浴。きょうも晴れつづいたので、浴客はみな元気がよく、桂川の下流へ釣^{つり}に行こうというのもあつて、風呂場は頗る賑わっている。ひとりの西洋人が悠然として這入つて来たが、湯の熱いのにしおどろいた体^{てい}であつた。

朝飯まえに散歩した。路^{みち}は変らぬ河岸であるが、岩に堰^せかれ、旭日にかがやいて、咽^{むせ}び落つる水のやや浅いところに家鴨数十羽が群れ遊んでいて、川に近い家々から湯の烟^{けむり}がほの白くあがっているなど、おのずからなる秋の朝の風情を見せていた。岸のところどころに芒^{すすき}が生えている。近づいて見ると「この草取るべからず」という制札を立ててあつて、

後の月見の材料にと貯えて置くものと察せられた。宿に帰って朝飯の膳にむかうと、鉢にうず高く盛った松茸に秋の香が高い。東京の新聞二、三種をよんだ後、頼家の墓へ参詣に行つた。桂橋を渡り、旅館のあいだを過ぎ、的場の前などをぬけて、塔の峰の麓に出た。ところどころに石段はあるが、路は極めて平坦で、雑木が茂っているあいだに高い竹藪がある。槿むくげの花の咲いている竹籬たけまがきに沿うて左に曲ると、正面に釈迦堂がある。頼家の仏果円満を願うがために母政子の尼が建立したものであるという。鎌倉の覇業を永久に維持する大なる目的の前には、あるに甲斐かいなき我子を捨殺しにしたものの、さすがに子は可愛おおいいものであつたろうと推量おしはかすると、ふだんは虫の好かない傲慢の尼將軍その人に対しても一種同情の感をとどめ得なかつた。

更に左に折れて小高い丘にのぼると、高さ五尺にあまる楕円形の大石に征夷大將軍左金吾頼家尊靈んごと刻み、煤すすびた堂の軒には笹竜胆ささりんどうの紋を打った古い幕が張つてある。堂の広さはわずかに二坪ぐらいで、修善寺の方を見おろして立つている。あたりには杉や楓かえでなど枝をかわして生い茂つて、どこかで鴉からすが啼いている。すさまじいありさまだとは思つたが、これに較べると、範頼の墓は更に甚だしく荒れまさっている。叔父御よりも甥の殿の方がまだしもの果報があると思ひながら、香を手向たむけて去ろうとすると、入違いれちがひに來て磬けいを

打つ参詣者があつた。

帰り路で、ある店に立つてゆで栗をかうと実に廉やすい。わたしばかりでなく、東京の客はみな驚くだろうと思われた。宿に帰つて読書、障子の紙が二カ所ばかり裂けている。眼に立つほどの破れではないが、それにささやく風の音がややもすれば耳について、秋は寂しいものだとしみじみ思わせるうちに、宿の男が来て貼りかえてくれた。向座敷は障子をあけ放して、その縁側に若い女客が長い洗い髪を日に乾かしているのが、榎えのきの大樹を隔ててみえた。

午後は読書に倦うんで肱ひじまくら枕きを極めているところへ宿の主人が来た。主人は善よく語るの
で、おかげで退屈を忘れた。きょうも水の音に暮れてしまったので、電灯の下で夕飯をす
ませて、散歩がてら理髪店へゆく。大仁おおひと理髪組合の掲示をみると、理髪料十二銭、また
その傍に附記して「ただし角刈とハイカラは二銭増しの事」とある。いわゆるハイカラな
るものは、どこへ廻つても余計に金の要いることと察せられた。店さきに張子の大きい達摩だるま
を置いて、その片眼を白くしてあるのは、なにか願掛けでもしたのかと訊いたが、主人も
職人も笑つて答えなかった。楽隊の声が遠くきこえる。また例の活動写真の広告らしい。
理髪店を出ると、もう八時を過ぎていた。露の多い夜気は冷々と肌にしみて、水に落ち

る家々の灯のかげは白くながれている。空には小さい星が降るかと思うばかりに一面に燦めいていた。宿に帰って入浴、九時を合図に寢床に這入ると、廊下で、「按摩は如何さま」という声がきこえた。

三

二十八日。例に依つて六時入浴。今朝は湯加減が殊によろしいように思われて身神爽快。天気もまた好い。朝飯もすみ、新聞もよみ終つて、ふらりと宿を出た。

月末に近づいたせいか、この頃は帰る人が一日増しに多くなつた。大仁行の馬車は家々の客を運んでゆく。赤とんぼうが乱れ飛んで、冷たい秋の風は馬のたてがみを吹き、人の袂を吹いている。宿の女どもは門に立ち、または途中まで見送つて「御機嫌よろしゅう……来年もどうぞ」……など口々にいつている。歌によむ草枕、かりそめの旅とはいえど半月一月と居馴染めば、これもまた一種の別れである。涙脆い女客などは、朝夕親んだ宿の女どもといい知れぬ名残の惜まれて、馬車の窓からいくたびか見送りつつ揺られて行くのもあつた。

修禪寺に詣でると、二十七日より高祖忌執行の立札があつた。宝物一覽を断られたのもこれがためであると首肯うなずかれた。

転じて新井別邸の前、寄席のまえを過ぎて、見晴らし山というのに登つた。半腹の茶店に休むと、今来た町の家々は眼の下に連なつて、修禪寺のいらかはさすがに一角をぬいて聳そびえていた。この茶店には運動場があつて、二十歳ばかりの束髪そびの娘がブランコに乗つていた。勿論土地の人ではないらしい。山の頂上は俗に見晴らし富士と呼んで、富士を望むによろしいと聞いたので、細い山路をたどつてゆくと、裳にまつわる萩や芒がおどろに乱れて、露の多いのに堪えられなかつた。登るにしたがつて勾配が漸く険しく、駒下駄ではとかくに滑ろうとするのを、剛情にふみ堪えて、先まずは頂上と思われるあたりまで登りつくと、なるほど富士は西の空にはつきりと見えた。秋天片雲無きの日にここへ来たのは没も怪つけの幸であつた。帰りは下り阪を面白半分に駈け降りると、あぶなく滑つて転びそうになること両三度。降りてしまつたら汗が流れた。

山を降りると田たん甫ぽ路みちで、田の畔には葉は鷄けい頭とうの真紅なのが眼に立つた。もとの路を還らずに、人家のつづく方を北にゆくと、桜ヶ岡の麓を過ぎて、いつの間にか向う岸へまわつたとみえて、図らずも頼家の墓の前に出た。きのう来て、今日もまた偶然に来た。おの

ずからなる因縁浅からぬように思われて、再び墓に香をささげた。

頼家の墓所は単に塔の峯の麓とのみ記憶していたが、今また聞けば、ここを指月ヶ岡というそうである。頼家が討たれた後に、母の尼が来り弔^{とむら}つて、空ゆく月を打仰ぎつつ「月は変らぬものを、変り果てたるは我子の上よ」と月を指さして泣いたので、人々も同じ涙にくれ、爾^{じらい}来^こここを呼んで指月ヶ岡ということになったとか。蕭^{しょう}条^{じょう}たる寒村の秋のうべ、不幸なる我子の墓前に立つて、一代の女將軍が月下に泣いた姿を想いやると、これもまた画くべく歌うべき悲劇であるように思われた。彼女がかくまでに涙を呑んで経営した覇業も、源氏より北条に移つて、北条もまた亡びた。これにくらべると、秀頼と相抱いて城とともにほろびた淀君の方が、人の母としてはかえつて幸であつたかも知れない。

帰り路に虎溪橋の上でカーキ色の軍服を着た廃兵に逢つた。その袖には赤十字の徽章^{きしやう}をつけていた。宿に帰つて主人から借りた修善寺案内記を読み、午後には東京へ送る書信二通をかいた。二時ごろ退屈して入浴。わたしの宿には当時七、八十人の滞在客があるはずであるが、日中のせいか広い風呂場には一人もみえなかった。菖蒲の湯を買切りにした料見になって、全身を湯に浸しながら、天然の岩を枕にして大の字に寝ころんでいと、好い心持を通り越して、すこし茫^{ぼう}となつた気味である。氣つけに温泉二、三杯を飲んだ。

主人はきょうも来て、いろいろの面白い話をしてくれた。主人の去った後は読書。絶間なしに流れてゆく水の音に夜昼の別わかちはないが、昼はやがて夜となった。食後散歩に出ると、行くともなしに、またもや頼家の方へ足が向く。なんだか執り着かれたような気もするのであった。墓の下の子三洲園という蒲焼屋では三味線の音が騒がしくこえる。頼家尊霊も今夜は定めて陽気に過ごさせ給うであろうと思いやると、我々が問い慰めるまでもないと思ひをつけて、墓へはまいらずに帰ることにした。あやなき闇のなかに湯の匂いのする町家の方へたどつてゆくと、夜はようやく寒くなつて、そこらの垣に機織虫はたおりむしが鳴いていた。

わたしの宿のうしろに寄席があつて、これも同じ主人の所有である。草履ぞうりばきの浴客が二、三人這入つてゆく。私もつづいて這入ろうかと思つたが、ビラをみると、一流うかれ節三河屋何某一座、これには少しく恐れをなして躊躇ちゆうちよしていると、雨がはらはらと降つて来た。仰げば塔の峰の頂上から、蝦蟆がまのような黒雲が這い出している。いよいよ恐れて早々に宿へ逃げ歸つた。

歸つて机にむかえば、下の離れ座敷でまたもや義太夫が始まつた。近所の宿でも三味線の音がきこえる。今夜はひどく賑にぎやかな晩である。十時入浴して座敷に帰ると、桂川も溢れ

るかと思うような大雨となった。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「十番随筆」新作社

1924（大正13）年4月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

秋の修善寺

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>